

石垣カフェー—遊戯的实践の空間

笠木丈

0. 地上5メートルの日々

某月某日

今日は雪が降っている。コタツのおかげで足元は暖かいが、外気は氷点下なのであんなに着込んだのにまだ寒い。お湯を沸かすあいだ、交差点の雪景色を眺める。行き交う人たちがみんな不思議そうに見上げながら歩いてゆくのが奇妙だ。近くの串カツ屋のおばさんが、差し入れを持ってきてくれた。感謝しつつ、お客さんと一緒にいただく。

某月某日

近所の病院に入院しているお坊さんが、一日三度、きまって顔を出す。聞けば、散歩のコースにしているとのこと。いつもパンの耳を持ってきてくれるので、コーヒーと物々交換している。ここ数日は、なぜか高校生が数学の参考書を持って勉強しに通っている。もうすぐ期末テストらしい。

某月某日

週末はお客さんが多くて忙しい。10人以上も入ると、さすがに手狭である。ハイテンションなフランス人が、フライパンでクレープを作ってくれた。美味なりき。近ごろは子連れのお母さんもやってくる。子どもにせがまれて、という場合が多いが、わが子を口実に遊びに来る親御さんもいる。天気予報によれば台風が接近しているそうだ。吹き飛ばされてしまわないか、少し心配である。

1. 石垣カフェとは何だったのか

京都市左京区、百万遍交差点。京都大学の外郭をなす石垣が、その一角を占めている。2005年の冬から夏にかけて、私はここで「石垣カフェ」なるものを営んでいた。鉄パイプとベニヤ板で組まれたバラックは地上から5メートル、正面の交差点に剥き出しの空間である。コーヒーは一杯50円、石垣にかけられたハシゴを登れば誰でも入れるオープンな場だ¹。年齢も職業もさまざまな人たちが、お茶を片手に話に花を咲かせている。カフェが存在した7ヶ月のあいだ、延べ人数にして3000人以上の人たちが訪れることとなった²。

いったいなぜ、このような空間が生まれたのか。実は、石垣カフェは石垣撤去工事に反対するための抗議行動だった。2004年10月、百万遍の石垣撤去を含む工事計画が発表される。見通しのよい百万遍交差点に面しているため、京大の石垣は立て看板を設置する絶好の場所であった。工事



計画によれば、石垣を撤去したうえで交通安全のための歩行者専用の遊歩道を設置するのだという。しかしながら、学生からの再三の要求にもかかわらず、話し合いの場がもたれないままに石垣周辺の予備工事が着工される³。そこで、学生有志が座り込みのためのやぐらを石垣に建設する。「とりあえず住むか」などと言いつつ畳とコタツを持ち込み、通りがかる人たちと一杯呑んでいると、近所のカフェの店員さんから「カフェにしてみたら？」という声が上がった。それ以降、数回の交渉を経て事態が決着を迎えるまで、カフェは「営業」を続けることになる⁴。

さて、本論では、こうした特殊な運動である石垣カフェとは何だったのかを明らかにしたい⁵。考察は二つの側面から行われる。第一の側面として、まずは石垣カフェが何を批判していたかを明らかにする。石垣カフェは「石垣撤去反対」というスローガンを掲げていることから、その主張は一見して明らかであるようにも思われる。しかし、石垣が撤去されることによって作られる空間がいかなるものであるかを明確にしない限り、その批判の真の内実は明らかではない。そのためには、近年進行している大学における空間の変容について整理する必要がある。そしてまた、石垣カフェは、単なる反対運動であるばかりか、それ自体が特殊な生活と交歓の場でもあった⁶。第二の側面として、場所そのものとしての石垣カフェの特性について、目的性という観点から考察する。

2. 大学空間の変容

石垣カフェが問題としたのは、先に少し述べたように、学生などの当事者との合意形成が不十分だったという手続きの上の不備だけではない。のみならず、しばしば誤解されるがゆえに強調しておきたいのだが、百万遍交差点に存在する物理的存在としての石垣だけ

が問題の俎上にあったのでもない。一連の騒動で争われたのは、本質的にはまさにいま再編成の途上にある大学空間の問題である。

近年、とりわけ国立大学の法人化と前後して、全国的に大学キャンパスが整備され様変わりしはじめた。真新しい建物が立ち並び、いかにも「若者受け」しそうなお洒落な雰囲気キャンパスに漂わせている。百万遍の石垣撤去計画もこうした流れのうちに位置づけることができる。実際に、石垣の撤去は「キャンパスアメニティ計画」と銘打たれた、学内の美化推進計画の一環であった⁷。石垣カフェが投げかけた批判の射程を測るために、京大のキャンパス再編全体を視野に入れて論じねばならないのはこのためである。

以上のような趨勢によって、キャンパスの環境はどのような変容を被るのだろうか。指摘しやすい点として、サークル活動やビラ・立て看板などの規制がより強まったことが挙げられるだろう。確かに、それらを禁じる標識は、学内で以前よりも多く目にするようになった。しかし、変容したのはそのような直接的な規制の強さだけではなく、空間の性質そのものなのではないか。だとすれば、単に直接的な管理の強化について言及するだけでは、事態の全体を捉えたことにはならないだろう⁸。以下では、大学の空間そのものの変質について論じることとする⁹。

キャンパスの変容について考察するために、ミシェル・ド・セルトーの議論に注目したい。「ある意志と権力の主体（企業、軍隊、都市、学術制度など）が、周囲から独立してはじめて可能になる力関係の計算（または操作）」¹⁰を、セルトーは「戦略」と呼ぶ。このときに前提とされる、自分に固有の場所を与える「空間の分割は、ある一定の場所からの一望監視という実践を可能にし、そこから投げかける視線は、自分と異質な諸力を、観察し、コントロールし、したがって自分の視界のなかに「おさめ」うる対象に変えることができる」¹¹。このような操作こそが、法人化と時期を同じくして、多くの大学のキャンパスにおいて展開されているのではないだろうか。

法人化以降、「経営」効率を上げるために自助努力を要請される国立大学、つまり市場原理に曝された大学にとって、自らの纏うイメージに無関心でいることは難しい。大学は、自らの品質管理を怠らず、外部の「顧客」に好印象を与えなければならない。そして、キャンパスの有様は大学のイメージに直結する。こうして求められるのが、大学の空間を一望のもとに見渡し、そこに自らの意志を行き渡らせる視点であり、空間はそれが可能となるように変形させられる。

一望監視を可能にする「分割」、それはキャンパスでは、それぞれの場所における機能の一義的な決定という形式で実現されていると考えられる。管理主体は地図を区画し、機能ごとに塗り分けようと試みる。「何がなされているのか分からない空間」は消滅することが

望まれる。そうすれば、もはや空白は存在しない。そして、本来定められた機能以外の用法で空間を使用する人々に対しては、どこか別の場所で行うように通告することができる。このように空間を再編成することで、そこからイレギュラーなものを適切に排除し、空間の使用状態について容易に掌握することが可能なのである。

しかし、実際に人間が生活し活動する空間では、そのように一義的に機能が特定されることはない。かつて京大に存在したある校舎がこのことを示す例となるだろう。そこでは、教室は24時間開放され、学生は授業の行われていない空き教室で、思い思いの活動——ほとんど「活動」と呼べるか分からないレベルのものも含めて——に打ち込むことができた。サークルでの音楽や演劇の練習はもちろんのこと、おしゃべりや読書をしていたり、あるいは勉強会が行われている場合もあるし、ただ単に寝ている学生もいる。このように極端に開放された事例でなくても構わない。ある目的のためにのみそこに留まり、それが果たされれば速やかに立ち去るような空間でなければ、つまり、何気ない場所であっても人々が生活し活動する場所であれば、すでにそれだけで、そこは一義的な機能の空間ではありえない。留まりうる場所、つまり何をするともなく、しかし、何かをできるような場所こそが文字通りの溜まり場なのである。

さらに、変容しつつあるキャンパスの特性として、空間における機能の一義的な決定のみならず、異物の排除という点が指摘できる。キャンパスを印象良くアピールするためには、空間が美しく整備されていることが望ましい。このように考えるなら、学生の活動の痕跡——壁にこびりついたビラ、古い落書き、長年の使用による建物の傷みなどは、不要なノイズでしかない。だがそれらは本当に無価値な夾雑物にすぎないのだろうか。

私には、あるとき石垣カフェで出会った学生との会話が思い出される。彼の在籍する東京の私立大学では、京大などよりもはるかに徹底して学生の活動に対する規制や学内の「美化」が浸透しているという。彼は、空間に一切の記憶が残されていないこと、そしてまた、自分の行為がそこに痕跡を残さないことの空虚さについて語っていた。彼が語ったように、確かに活動の痕跡は空間にある種の意味を付与している。

ふたたびセルトーを参照しよう。彼は先に述べた「戦略」と区別される「戦術」という概念を用いる。それは、「自分にとって疎遠な力が決定した法によって編成された土地、他から押しつけられた土地でなんとかやっていかざるをえない」場合においても、「所有者の権力の監視のもとに置かれながら、何かの状況が隙を与えてくれたなら、ここぞとばかり、すかさず利用する」¹²ような実践を意味している。このような実践は、一見何気ないような日々の生活を通して行われる。

このようなセルトーの議論を踏まえるなら、初めは自らに疎遠であった、一義的に機能

を決定された空間も、日々の行為それ自体を通して次第に自分たちのものとして領有されると考えられる。そして、行為を通して空間が領有されるときに残されるものこそが、上に述べた「痕跡」なのではないだろうか。行為の記憶を宿した痕跡が媒介となることで、あるときは他者から触発され、またあるときは他者を触発することが可能になる。その他者とは、時を同じくしてその場所で活動する他者のみならず、幾年も隔てた後にその場所を訪れる他者でさえもありうるのである。

さらに、残された痕跡は空間の可能性をも示唆する。初めて訪れたその場所が塵ひとつない空間であるか、また壁中にビラの貼られた空間であるかによって、単にそこから受ける印象が異なるだけではなく、その場所における人々の意識や行動までもが規定される。いかなる痕跡も残されていないような場所では、そこで何らかの活動を行い、痕跡を残すことに思い至ることもないかもしれない。もし、完全に無菌化された空間に新入生が足を踏み入れるとすれば、彼はそこに留まり、創意工夫を凝らして空間を自分のものにしようと試みるだろうか。おそらく彼あるいは彼女は、そうした試みを考えつくことすらないのではないか。だが、痕跡が不穏にざわめいている場所では、その空間の新たな可能性についてさまざまな想像が掻き立てられるのである¹³。

以上のように、石垣カフェの「石垣撤去反対」というスローガンのうちに込められていたのは、機能ごとに分割することで管理され、また痕跡が消滅し無菌化されつつあるキャンパスの現状についての批判であったとすることができる。

3. 開かれた自足性の場所

しかし、石垣カフェは、スローガンの喧伝や大学との団体交渉などの政治的行動のみによって、再編されてゆく大学空間に対抗したのではない。セルトーの述べるような「戦術」、つまり日常生活の営みを通じた抵抗は、コーヒーを淹れ、くつろぎ、誰かと語らうという石垣カフェの日々の活動そのものである。続いて、日々の生活が送られる空間でもあった石垣カフェという場所について以下に論じたい。

考察の端緒として、石垣カフェが人々にどのように見られていたのかをあらためて思い起こしてみよう。幸いなことに、こういった社会運動には珍しいほどさまざまな人々に受け入れられ、面白がってもらえたように思う。感謝するかぎりである。しかし、もちろん冷ややかな見方をされることも少なくなかった。「あそこだけはやめといたほうがいい」「あんなところに行ったら人生おしまいだよ」――遊びに来てくれた人たちによれば、周囲にはこのような反応もあったようだ。一定の支持を受けた半面、さまざまに叩かれた石垣カフェでもあったが、そのなかでもこの種の反応に関して、少し立ち止まって考えてみたい。



ひょっとするとこうした反応には、単なる「キワモノ」のレッテル貼り以上のもの、つまり石垣カフェのある本質が見いだせるのではないか。大げさな言い方をすれば、実際に石垣カフェという場所には、場合によっては「人生」を狂わせてしまうような不穏な契機が芽吹いていたのではないだろうか。

今度はお客さんの発言に注目してみよう。カフェでよく聞かれた言葉に、次のようなものがある。「もうこんな時間か、そろそろ帰らないと。ここに来ているとついつい長居してしまうんですね」——「ついつい長居してしまう」ような空間である、石垣カフェ。実はこうした表現には、単に「居心地の良い空間」という以上の意味が込められていると思われる。そのことを明らかにするために、さらに次のような出来事について触れたい。

カフェがはじまって一ヶ月余りが経過し、運営の型ができはじめてきた頃、店番のシフト制が一時的に導入されたことがあった。ある日、私は遅刻し、交代を待っていた相手に謝罪を述べていると、カフェの中にこのような発言をする人があった。「時間を守らないというのは石垣カフェ的なことであり、それはそれで重要なことなのではないか」と。常識からすれば、理解不能な発言である。しかし、私はそのとき目から鱗が落ちる思いがした。この言葉のうちには、石垣カフェにおける時間の流れ方が端的に表現されている。それは、目的性から自由な時間である。真木悠介が特徴づけた、近代の時間意識について参照してみよう。

人間存在の自然からの自立と疎外は、……未来に向かって現在の生を手段化する構造（目的性の回路）を獲得せしめるとともに、……つぎつぎと過去を帰無しつつ未来に向かう不可逆性としての時間の観念を切実たらしめる。第一の契機（目的性の回路）が第二の契機（直進する時間性）の軌道にのると、それは、つぎつぎとよりかなたにある未来に向かって現在の意味を外化してゆく時間の感覚を存立せしめる¹⁴。

人間を疎外する、直進する時間性と結合した目的性が石垣カフェでは一時的に解除されていたのではないか。時間通りに店番に入るといった些細な「目的」であっても、当然のことながら、流れていく時間の一部分を「スケジュール」として区切り、また、やるべきこと

がらは済ませておくなどして予定の時間帯を空白にしておかなくてはならない。さらに重大で、多くの時間が必要となる「目的」であれば、未来に配置された目的性に照準を合わせ、現在の時間をつねに管理し、効率よく整備しておく必要があるだろう。

「そろそろ帰らないと」いけないのは、「夕飯の支度があるから」、



「明日、学校があるから」、「もうすぐ昼休みが終わるから」等々の理由によるのであり、何らかの目的がその人々のことを待っている。それらの目的に対して目をつぶり、石垣カフェでくつろぎ続けることは、ひょっとすれば自分の「人生」に不調和をもたらすかもしれない。というのも、目的性を拒否することは、まっとうな社会生活のために必要不可欠な時間意識を脱ぎ捨てることだからである。これは確かに危うい事態ではある。深入りしすぎると、元の世界には二度と戻れなくなるかもしれない。しかし、目的性によって時間を把握する際に失われる豊かさが、石垣カフェにはあったということもできる。その豊かさが訪れた人々に、整序された時間の意識を一時的に忘却させ、「つつい長居してしまう」ようにいざなうのかもしれない。このように石垣カフェには危うさでもあり、しかし同時に豊かさでもあるような両義的な側面が存在していたのである。また付言しておく、目的性に従うことが自己を社会化させる過程でもあるとすれば、そこから逸脱することは日常置かれている社会的文脈を一時的に離れることを意味する。普段の生活の文脈では係わり合いを持たないような人々、例えば主婦とヒッピーのような組み合わせが交流する空間であったことは、石垣カフェの魅力のひとつであったと思われる。

とはいえ、いくら石垣カフェがいわば浮世離れた空間であろうとも、カフェそのものとしては「石垣撤去反対」という目的を掲げていたではないか——このような疑問は当然生じるだろう。しかし、石垣カフェは、石垣撤去反対について賛同を求めるべく、訪れた人々に熱心なアピールを行う場であったわけではない。署名集めや石垣問題についての説明も時には行ったものの、あくまで第一義的にはお客さんと場所を共有することを重視していたように思う。私たちが目指したのは、政治的目的のために手段を従属させること、つまり、あくまで運動のためのカフェというものよりも、カフェをそれ自体で独立した営みとすることだった¹⁵。しかし本節の冒頭で述べたように、石垣カフェがセルトー的な「戦

術」であるとすれば、ことさらに政治的行動を行う必要はない。日々語らい、コーヒーを淹れるという行為そのものが、すでに法人化後のキャンパス再編に対するパフォーマンス的な対抗たりうるのである。

確かに、このような石垣カフェのスタイルが、時には「お遊び」にすぎないと揶揄されていたことも事実である。しかし、石垣カフェはまさに「遊び」であることを志向していたように思う。それは、次に述べる意味においてである。

上述のように、石垣カフェは社会生活に要請される目的性とも、政治的な目的性ともいくらかの距離をもった空間であった。しかしながら、それは石垣カフェに目的性が皆無であったということを意味するのではない。もしそうだとすれば、石垣カフェは何もすることのない退屈で空虚な空間だということになるが、石垣カフェにおいて流れていたのは、気がつけば時には何時間も経過しているような、濃密で豊かな時間であった¹⁶。確かに、石垣カフェは外部の目的性には従属せず、一定の独立を保っていたと言える。しかし、石垣カフェは、いうならば自足的な目的性を持つ空間だった。石垣カフェが「遊び」の空間だったと言えるのは、この意味においてである。というのも、遊びは何かそれ以外のためにあるのではなく、ただ遊ぶために遊ばれるのだから。

また、すでにルールが確定している「ゲーム」のような遊びとは異なり、小さな子どもの遊びにおいては、目的を定めるルールそれ自体が流動的で遊びの最中にいつの間にか更新されていくこともしばしば起こりうる。遊びながら遊びそのものが変化していったり、新しい遊びが生まれたりする。この点でも石垣カフェは遊びの性質を備えていた。まさに一義的に機能を確定された空間がそうであるように、場所に対してあらかじめ与えられており、そののみを目指して人々が場所を訪れるような目的は、石垣カフェには存在しなかった。目的はその場において、その度ごとに作り出される。そして、この目的の不定性は、石垣カフェが開かれており、そのことが偶然性を招きよせるということ、つまりさまざまな人々が偶然に訪れ、しばしば予期しない出来事が生起することに由来している。ひと休みしてコーヒーを飲もうとやって来た人が、いつの間にかはじまった、隣のお客さんによる即興演奏に耳を傾けている場合もある。

そもそも、自足性は必ずしも閉鎖性を意味しない。むしろ石垣カフェにおいては、開かれていることそのものによって、場に偶然的な性格が与えられ、それ自体として価値のある空間であることができた。遊ぶために遊ぶことを、個人的な、あるいは内輪の閉じた領域に限るのではなく、開かれたもの、誰とでも分かちあえるものとする。そして、そのような遊びを政治的手段へと貶めることなく、政治的实践そのものとして行うこと。石垣カフェという営みは、以上のようなものであったと考えられる¹⁷。

註

¹ ちなみに、住所は「京都市左京区百万遍石垣上ル」である。ちゃんと郵便も届いた。

² 石垣カフェは2005年1月21日から8月16日までの期間、存在した。その間、カフェを訪れたのは、学生、子ども、主婦、旅人、外国人、芸術家、修学旅行生、無職、住職、左翼、右翼、大学職員、副学長などなど、実にさまざまな人々であった。なお、石垣カフェには公式サイトが存在する。

<http://ishigakicafe.hp.infoseek.co.jp/>

³ 石垣撤去工事を含む学内の工事計画の発表を受けて、学生自治会とサークルは連名で「本部構内北西門改善計画を考える会」を結成し、大学に対して工事計画についての説明および交渉の場をもつことを要求する。しかし、大学側は当時、そうした場の開催は不必要であるとして、拒絶を続けていた。混同されがちだが、この「考える会」は石垣カフェとは異なる団体である。大学側との交渉の調整や場の設定などは「考える会」が主体となって行った。

⁴ 「営業」とはいうものの、営利活動ではないので、50円はカンパとしていただいていた。メニューは一律50円で、他に紅茶、ココア、レモネード、夏季にはカキ氷なども存在した。ちなみに、賃労働として考えた場合、あれほど割に合わないものはない。

交渉を重ねた結果、百万遍の石垣をほぼ残したうえで歩行者用の小道を設置するという、立て看板の設置環境と大学の主張する交通の安全とがともに保証されるかたちに、工事計画は変更される。当初の目的を達成した石垣カフェは、めでたく閉店となった。

⁵ 考察に先立って、以下の点を断っておきたい。私は百万遍に石垣カフェが出現した当初の段階から、この運動に関わってきた。そのため、以下の考察は運動内部からの視点によるものであり、考察の材料として一部に自分自身の経験を交えている。こうした記述に何らかのバイアスが含まれている可能性はもちろん存在する。また、石垣カフェのなかでも全員が同一の意見をもっていたわけでもない。したがって、本論を通して描かれた石垣カフェの像も、私個人の視点から見られたものにすぎない。

⁶ このように石垣カフェの批判的側面と場としての積極的側面のそれぞれに着目した論考には、すでに篠原(2005)がある。

⁷ キャンパスアメニティ計画http://www.kyoto-u.ac.jp/notice/05_notice/ippan/041119_a.htm

⁸ これは、「美化」と連動した直接的な規制・禁止が重要な問題ではないことを意味しない。むしろ、京大や他大学でも校舎の立替と同時に学生の活動が制限される事態は頻繁に生じている。

⁹ 篠原(2005)においてもルフェーブルやジェイムソンの議論を援用しつつ、キャンパスの変容について均質化、規格化という点が指摘されていた。

¹⁰ セルトー(1987, p. 100).

¹¹ セルトー(1987, p. 101).

¹² セルトー(1987, p. 102).

¹³ もちろん、以上に述べたような多義的に領有された空間、痕跡の残された空間を称揚することで、本来に必要な工事計画に反対するのであれば、私たちは単に頑迷な守旧派でしかない。老朽化をはじめとするやむを得ない理由で場が作りかえられることも、いずれはあるかもしれない。とはいえ、そのときにもやはり、何らかの実践を通じて新たな空間を私たち自身の場所として再領有する可能性は残されている。ただ、実践さえあれば、いかなる空間でも等しく自分たちの場として領有できると考えることは、いささか楽観的にすぎる。建物が建て変わることによって、さまざまな規制が生じ痕跡そのものが刻めなくなることもあるだろうし、すでに蓄積されてきた場所の記憶はリセットされてしまっているのだから。

¹⁴ 真木(2003, pp. 312-313).なお、原文の傍点は省略した。

¹⁵ もちろん、現実的には、つねにカフェが自発性を原理として運営されていたわけではない。例えば、当初は飽きることのなかった店番も、カフェが長期化するなかで次第に義務的なものになってしまったくらいはある。しかし、根底にあるのはやはり楽しいからその場を維持するというモチベーションであった。

¹⁶ それ自体のほかには、何のためにもならないような、しかし豊かな営みは、仮に名づけるなら、「充実した無駄」とでも呼ぶうるのではないか。近年、大学の雰囲気が何かとせわしく変わってゆくのを見るにつけ、大学とはこのような「無駄」を醗酵させ、培養する空間であっても良いのではないかと思われる。

¹⁷ 論じ終えてみて、石垣カフェのポジティブな側面にばかり記述のウェイトがあるようにも思われる。だ

が、偶然性に開かれた空間である石垣カフェには、当然さまざまな苦い思い出も存在する。例えば、百万遍周辺には居酒屋も多く、深夜に酔っ払いが乱入することもしばしばだった。

また、石垣それ自体は無事に保存されたとはいえ、それによって2節に述べたようなキャンパス全体の再編が阻止されたわけではない。それは押しとどめられることなく、依然として進行中であるということについても付言しておきたい。

文献

篠原雅武 (2005). 「剥き出しの突飛な日常 石垣カフェとは何だったのか」, 『現代思想』, 33-12.

真木悠介 (2003). 『時間の比較社会学』, 岩波書店.

ミシェル・ド・セルトー, 山田登世子訳 (1987). 『日常の実践のポイエティック』, 国文社.

〔哲学修士課程〕